

# エゾシカ関係対応状況について

機関名	一般社団法人 北海道自然保護協会	部署名	
令和4年度取組状況			
<p>○ 主な取組</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・事業（施策）名 別紙のとおり</li><li>・目的</li><li>・実施内容</li><li>・実施数量</li></ul> <p>※ 既存説明資料等があれば、その添付に換えて差し支えありません。</p> <p>※ 複数の取組があれば、適宜行数、ページを追加して構いません。</p>			
令和5年度取組予定			
<p>○ 主な取組</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・事業（施策）名</li><li>・目的</li><li>・実施内容</li><li>・実施予定数量</li></ul> <p>※ 既存説明資料があれば、その添付に換えて差し支えありません。</p> <p>※ 複数取組があれば、適宜行数、ページを追加して構いません。</p>			

## 令和4年度取組状況

### ・事業(施策)名

エゾシカに関連する記事を掲載した会誌『北海道の自然』No.61の発行

### ・目的

市民の皆さんに、北海道にはかつてエゾシカの天敵であったオオカミが生息していたことを知っていただき、またその再導入について考えていただくことにより、皆さんにエゾシカ問題をさまざまな視点から議論し、エゾシカ問題をより深く知っていただくことを目的としている。

なお、「オオカミ再導入」については、種々検討すべき課題があり、また道民の合意も必要です。北海道自然保護協会として「オオカミ再導入」に賛成しているわけではありません。

### ・実施内容

上川郡標茶町でオオカミほかの動物を飼育し、自然教室を開いていた桑原康生氏(株式会社オオカミの森代表)に『北海道の自然』No.61に記事「北海道へのオオカミ再導入の可能性」を執筆していただいた。

資料として、記事PDFを添付します。

# 北海道へのオオカミ再導入の可能性

桑原 康生

## 要旨

私は過去にオオカミを飼育した経験や諸外国の文献を通して得た知識、さらに米国のオオカミ研究者の方々との交流を通して得た情報をもとに、オオカミの目線で日本の自然を考えてきた。その経験を踏まえて、オオカミの生態に関する一般的な知識、オオカミの生態系における役割、主食とする大型有蹄類（特にシカ類）に対するオオカミ効果等に関して、米国イエローストーン国立公園の事例を参考に、その再導入の可能性について考える。

## 1 標茶でオオカミを飼育

私は現在茨城県にて「株式会社オオカミの森 Howlin'Ks Nature School（ハウリンケイズ・ネイチャースクール）」の代表を務め、主に乗馬施設の運営を中心に活動している。過去には、1995年から2019年まで標茶町虹別原野にて、オオカミ延べ27頭、ヒョウ1頭、馬やワシ、タカなどとともに暮らし、「オオカミの目を通して自然を考える」というテーマのもとに自然教室を開いていた。そこでは約7000坪の敷地内の半分ほどのナラ林を柵で囲い、スクールの方々にオオカミをご見学いただくと同時に、ログハウス内でオオカミの生態についての講義や、オオカミ再導入の可能性について参加者の方々との意見交換を行っていた。その活動の一環として、ほぼ毎年、過去に15回ほど米国イエローストーン国立公園（以下イエローストーンとのみ表記）への野生動物観察ツアーを引率し、現地でオオカミ再導入に携わった研究者の



図1 ネイチャースクールのオオカミたち



図2 イエローストーンに再導入されたハイイロオオカミ

方々から生の声をお聞きしてきた。そこから得た情報や私自身で調べた知識をもとに、北海道へのオオカミ再導入に関して、考えてみたい。

## 2 北海道の自然と諸外国の自然

### 2.1 日本人の自然観

私のネイチャースクールに参加されたお客さん方に、まずお聞きするのは「自然とは何か」に関するご意見である。よく聞く意見が、「人の手の加わっていない状態」と「本来あるべき姿」、そして最も多いのが「人工物のない姿(状態)」である。オオカミの話をする前に、まずはその「自然とは何か」について考えてみようと思う。

巷ではよく、「自然が多い、少ない」や、「大自然の中で～」という表現を耳にする。私は自身で乗馬施設を運営している関係で、TV等で乗馬シーンが放送されると興味を持って観ている。ある番組ではリポーターの方が馬にまたがり、柵に

囲まれた芝生の上をインストラクターに引かれながら、「この大自然の中での乗馬は最高ですね！」と感動していた。つまりその方にとっては馬場の柵に囲まれた人工的に植えられた芝生の上でも、周りにある程度の木があれば（それが人工的に植えられた木であっても）、「大自然」なのであろう。その例からもわかるように、どうも世間一般でいう自然とは、「(都会に比べて) 比較的緑の多い場所」のようだ。

さて、先の自然教室でのお客さんの意見として最も多い、「人工物のない姿」に目を戻してみよう。確かに人工物=不自然というイメージをお持ちの方は多いであろうし、特に都市部から例えば登山等に行かれた方が目の前にビル等の人工物のない姿を目にされれば、自然を感じると思う。その方にとって都市部は人の生活空間、クマやシカの住む森は大自然、と線引きをすることが可能だろう。しかし私がかつて暮らしていた北海道の家の周りはずべて人工的に植えられたチモシーなどの牧草地で、オオカミたちが走り回っていた裏の林はカラマツやナラの人工的な林だった。しかし同時にその牧草地をシカが走っていて、敷地内にはキツネが巣を作っていた。そのように、人工的なものの中に自然のものが存在する状態では、どこからが自然であるという線引きができなくなる。北海道にはそのような状況が多くみられる。

私の自然観としては、人を含めた人工物があってもそれもまた自然の一部と考えている。人もこの地球上で生まれ進化してきた動物の一種である以上自然の産物であり、またその人工物も含めて自然ととらえている。人工物の有無ではなく、多種多様な種が密接に微妙な関係の中で結びつき、生態系の中でそれぞれの位置で役割を持ち、「本来あるべき姿」を形作っている状態が自然であると考えている。自然を本来の姿ととらえるならば、当然本来いた種であるオオカミ抜きでは自然保護は語れないであろう。オオカミやカワウソなくして日本には自然が存在せず、保護することも不可能となる。トキやコウノトリの導入を自然保護ととらえるならば、オオカミ導入も当然行うべきだと感じる。

## 2.2 北海道の自然と他地域との比較

北海道の知床国立公園の動物相、植物相と例えばイエローストーンのそれとを比べると、どちらにも生物相の厚さを感じる。しかし知床には、イエローストーンでは感じられる良い意味での緊張感がない。その差がどこから生まれるかを考えてみると、頂点捕食者の存在の有無である。もちろ

ん知床は世界的に見てもトップクラスのヒグマの生息密度の高い地域だが、いかんせん、食物連鎖を考えた場合の生態系における他の種、例えばシカとの関係性を考えた際には、ヒグマはその食性から考えて、シカに対しての純然たるコントローラーとしては不十分な存在であろう。イエローストーンにはオオカミのほか、ヒグマ、ピューマ、コヨーテ、リンクス等がそれぞれに適する被食獣との関係を持っているが、知床ではシカに対する唯一の種となる捕食獣が不在である。

米国では100年前の生物相復元を目指す目的で、オオカミの再導入をはじめ様々な試みがなされてきた結果、バランスの良い生態系がよみがえりつつある。北海道では、知床が世界遺産に登録される際に、「知床は日本最後の秘境で、人の手の加えられていない、手つかずの自然がそこにはある」というアピール文句を耳にしたが、私の中では「人の手が加えられていないのならば、なぜエゾオオカミがないのか」との疑問を持った覚えがある。

## 3 オオカミの生態

### 3.1 種と起源

オオカミ再導入を議論するには、そもそもオオカミとはどのような動物であるかを理解しなければ始まらない。

オオカミにはハイイロオオカミ (*Canis lupus*)、アカオオカミ (*C. rufus*) などの種があり、近縁種には、コヨーテ (*C. latrans*)、アビシニアジャッカル (*C. simensis*)、キンイロジャッカル (*C. aureus*)、セグロジャッカル (*C. mesomelas*)、ヨコスジジャッカル (*C. adustus*) がいるが、ここでは一般的に「オオカミ」と言われているハイイロオオカミについてお話をします。

オオカミの起源は100万年前にさかのぼる。ユーラシアで大型化したハイイロオオカミはその後ヨーロッパやアジア、北米各地へ広がり、一部は氷河期に大陸と陸続きであった日本へも渡ってきたとのことである。このことからユーラシア(シベリア地方)に起源を持つハイイロオオカミが、一部は北米に、また一部は北海道へと氷の陸橋を渡り定着し、それゆえに両地域の亜種ともにとっても近縁の亜種であることがうかがえる。

### 3.2 オオカミの体格および能力

オオカミの感覚器官では、嗅覚がとくに発達しており、「1mの雪の下に埋もれた古いシマリスの死体を10mほどのところから嗅ぎ付けた」と

か、「6.5 km 以上離れた子連れの子連れのムース（ヘラジカ）のにおいを嗅ぎ取った」という表現が記されている。またカリブー（トナカイ）の尿や糞、臭腺から出るにおいからその個体の体調を判断し、歯周病に罹ったシカをその口臭から嗅ぎ取り、狩りの対象とすることなども報告されている。また同様に聴覚も優れていて、最大で 80 khz での高周波を聴き取る能力があるようだ。視覚に関しては、動体視力や薄暮での視力にたけており、色の識別に関しては、血の色の赤、尿の色の黄色に対して反応する、とのことである。

オオカミは平均して 2 歳ぐらい（1 歳から 5 歳まで幅がある）になると生まれた群れを離れて移動し、新たな群れを作る。これをディスプレイというが、その移動距離は餌動物の密度などの周辺環境により変化はあるが、長い場合には 800~1000 km に及ぶ。

オオカミは齧歯（げっし）類などの小動物からムース、バイソンといった体重が 800 kg や 1 t に及ぶ大型動物まで捕食するが、主な獲物となるのはシカやイノシシなどの有蹄（ゆうてい）類で、イエローストーンでは、季節による変動はあるが、86.0~97.5% がシカ類で占められている。またヨーロッパやアジアでも同様にシカ類、加えてイノシシやガゼルなどの有蹄類を捕食している。オオカミはほかに果実類、魚や鳥なども食べ、イタリアでは生ごみに依存しているオオカミもいるとのことである。しかし一般論としては、やはりオオカミはシカを主食とする動物である、と言える。

## 4 オオカミの生態系に与える影響

### 4.1 シカに与える影響

先にお話したように、オオカミは主にシカ類などの有蹄類、イエローストーンでは特にエルク（*Cervus canadensis*）を主な獲物としている。ちなみにエルクは、イエローストーンに生息する他



図3 イエローストーンのエルク

のシカ類と比べると、エゾシカを含むニホンジカ（*C. nippon*）と近縁の種である。1995 年に約 70 年ぶりにイエローストーンにオオカミが再導入されて以来、その主たる餌動物であるエルクや、さらには生態系全体への影響も話題となっている。ここからは、主にそのイエローストーンでのオオカミとエルクの関係についてみていこうと思う。

イエローストーンの研究者が現地でもオオカミの食べていたもの（オオカミが自ら捕食したものや、すでに死体として横たわっていたものを含めて）の健康状態を調査してみると、栄養失調や歯周病、リウマチなどに罹っていたものが多いようだ。現地の研究者たちにより、オオカミが歯周病のエルクの口臭を嗅ぎとり、リウマチで後肢の動きが不自然なエルクをテストランで走らせて判別し、それらの個体をピンポイントで狙うことが報告されている。以上のことから、オオカミによる狩りは、エルクの個体数に影響するだけでなく、エルクにとっても不健康な個体を間引きし、健康な個体を維持する役割も持っている。

イエローストーンの研究のあいだでは、Ecology of Fear という表現がある。直訳すると「恐怖の生態学」というおどろおどろしいものだが、具体的にはオオカミが再導入された後のイエローストーンでは、それまで主となる捕食者のいなかったエルクがオオカミに追われることによりストレスを感じた結果、出生率が低下し、また追われたエルクが常に移動しその間に植生が回復する、というものである。つまりオオカミの捕食行動には、直接的に一頭のエルクを減らすこと以外にも、出生率を低下させることにより間接的にエルクの個体数に影響を及ぼし、さらにはその地域の植生など、生態系全体への効果があると思われる。加えて現地では、オオカミが倒した獲物の死体のある個所の周辺土壌の栄養価と死体のない場所の栄養価を比較した研究もなされており、その結果死体周辺では他の場所の 100~500% も多くリン酸や窒素などの栄養素を含んでいたそうである。その栄養素がもととなり豊かな植生が生まれることを考えると、すべてのつながりを再認識する。

### 4.2 生態系に対する影響

オオカミがイエローストーンに再導入される以前には、エルクがアスペン（アメリカヤマナラシ）やヤナギの灌木地帯にとどまり、その新芽を過度に採食し、その結果、灌木はほとんど更新がみられなかったそうである。その後オオカミが導入されると、エルクはオオカミに追われ、灌木地帯に

とどまらず移動することで植物の更新が復活したとのことである。

上記の植物の復活は、また同時に湿原生態系にも影響を与える。イエローストーンにも生息する、世界最大のシカ、ムースは水辺周辺のヤナギの新芽や水草等、限られた植物を採食しているが、より多種にわたる食性を持つ環境適応力の高いエルクの個体数が増えると、ヤナギを過度に採食し、ムースの棲みにくい環境へと変化する。

またヤナギやアスペンが過度の食圧を受け減少すると、それらをよりどころとしているビーバーが影響を受ける。ビーバーの作るダムは川をせき止め、そこにたまった水辺周辺には湿原が生まれるのだが、そこに水生昆虫やそれを狙う肉食昆虫、さらにはそれを捕食する小型の鳥類や、さらにはその小鳥類を獲物とする猛禽類まで多種多様の生き物で形作る生態系が生まれる。

ヤナギという一種の植物から波及する異種間の関係性は、多種に及ぶ。そのヤナギがエルクに影響を受けることにより、多くの種に負の影響を与える。オオカミがいればその存在がエルクの適正な個体数に関係し、その結果が多くの種に影響する。それがまさに生物多様性だと言える。

以上のようなオオカミと他の動物や植物との関係性に関しては、イエローストーン現地の多くの研究者が賛同するところだが、同時に一部の研究者の間には異論も見られ、いまだ議論の余地がありそうだ。しかし過去に15年余り毎年かの地を訪れ、オオカミ導入後の定点観察をし、年を経るごとに目視できるエルクの個体数の大幅な減少や、乾いた草原地帯がヤナギの灌木地へと変化し、それに伴ってムースの目撃例が増えた現状を目の当たりにすると、やはりかの地の生態系におけるオオカミの存在意義を実感せざるを得ない。

そのほかにも、同じ頂点捕食者として一見して競合するオオカミとヒグマの間でも、オオカミが復活したことによりヒグマがオオカミの獲物の残りを間接的に摂取し、もしくはその獲物を奪うことにより直接的に摂取して、以前よりも効率よく多くのたんぱく質を得る機会の増えたヒグマの繁殖効率が上がり、結果ヒグマの個体数が増える可能性も話題とされている。

## 5 オオカミ再導入の可能性

### 5.1 誰がどこで行うのか

オオカミ再導入を想定した場合、それは到底一個人のなせることではなく、環境省等の国家プロジェクトとなる。その際、「既存の生態系への影

響」「家畜に対する被害」「人に対する被害」などの課題が生じるので、国単位の綿密な計画が必要とされるであろう。そして世の中には、様々な人が様々な意見を持っている。その中で一つの決断を下さなければならない、そこに鳥獣行政の難しさがあると思う。

私は以前、日本オオカミ協会（現、一般社団法人 日本オオカミ協会）の理事を担っていたが、当時知り合った、とある自治体の首長さんがオオカミ協会の提唱するオオカミ再導入に賛同し、地元自治体としてその活動を推し進めようと試みた。しかし周辺地域の反対にあい、頓挫した。前にお話したように、オオカミのディスプレイに際しては、時に800~1000kmの移動を行う。であるから北海道であれば、「知床国立公園にとどまってもらえれば、オオカミを放してもいいが」という意見を耳にしたことがあるが、縦に長い知床半島は最長部でも約70km、一方オオカミのテリトリーは小さなものでも数10km<sup>2</sup>あるので、広い北海道でもどこか一部に限って導入を検討することは不可能で、やはり北海道全体を視野に入れての計画となる。

### 5.2 面的、時間的なすみわけの重要性

北海道の知床国立公園は面積にして（陸部のみ）イエローストーン国立公園の約4%に過ぎない。イエローストーン国立公園は面積約9000km<sup>2</sup>弱、四国の半分ほどの広さがある。その広大な国立公園に現在100頭弱のオオカミが生息しているが、私がかの地の成功例をお話すると、「イエローストーンや米国は広いから人とのすみわけが成功したけれども、日本にはオオカミが自由に走り回るスペースはない」とよく日本の国土の狭さをネックとして挙げ、反対される向きもおられる。

このように、一般的に人と野生動物のすみわけを考える際には、面的な境界を定め人と野生動物の活動域に線引きをする傾向にある。もちろんその間に緩衝地帯、バッファゾーンを設け、そこを境にすみわけすることも必要だが、先に述べたようにオオカミのような行動範囲の広い種とのすみわけには狭い日本には限界がある。そこで同時に重要となってくるのが時間的なすみわけである。

私が以前訪れたポーランドの村、ビエスチャデの森にはオオカミ、アカシカやイノシシがおり、人の営みがある日中にはシカやイノシシは影を潜め、それを獲物とするオオカミも活発に行動しない。そして夕方以降にシカやイノシシが動き出し、オオカミの活動も活発になる。一般的なイ



図4 ヒグマとの近すぎる距離

メージとは異なり、イノシシやシカ、オオカミは本来夜行性ではないが、人の活動や狩猟圧を受け、人を避けて薄暮の時間帯や夜間を中心に活動するようになったのであろう。であれば、日中は人の活動時間帯で、彼ら野生動物はそれ以外の時間帯に活動するような状況を作ることが理想であると思う。同じ空間を利用した、時間的なすみわけがそこにはある。

私が北海道で25年暮らしていた家の近くにはクマの棲む森が広がっていたが、日中、めったにクマと遭遇することはなかった。その同じ森に早朝もしくは夕方入ると、日中と比べるとより多くのクマとの出会いがあった。であるから、ヒグマの生息域に足を踏み入れる際には、クマの活動域や時間帯を学習し、クマの活動が活発となる時間帯を極力避けて受動的に行動することや、またその逆に数が増えすぎた場合や問題行動を起こした個体に対しては駆除など積極的な狩猟圧を加え、彼らが人を避けて行動するよう導くことが、彼らとの共存につながると思う。

## 6 オオカミ再導入における課題

### 6.1 家畜への被害

オオカミ再導入を語る際に常に懸念されるのが、オオカミにより被る被害である。その一つ、家畜に対する被害を見てみよう。

北米における家畜被害の一例をあげると、2014年の米国魚類野生生物局の報告によると、イエローストーンのあるモンタナ州、アイダホ州、ワイオミング州にまたがる北部ロッキー山脈において、136頭の牛と114頭の羊が被害にあったとのことである。

上記の家畜被害を考える際に注目したいのは、かの地における家畜の飼育形態である。私にはモンタナ州で肉牛を飼育している知人がいるが、そこでは広大な原野に牛を放牧し、ひと月かそれ以

上の間隔でしか牛の様子を見に行かない。その放牧地はオオカミやヒグマ、ピューマ等の肉食獣の生息域で、私が見回りに同行した際には、ひと月ぶりに様子を見に行く牛が被害にあっており、雪の上にはクマの足跡があった。

一方、北海道を中心とする日本の酪農や畜産農家の飼育形態は、畜舎内管理が多く割合を占めていることと思う。その日本でも過去には、東北地方などで馬を原野に放牧し、ニホンオオカミのいた時代には被害にあった記録があり、現代でも町営の育成牧場や一般農家でも放牧を行うが、米国のような広大な地域に放牧してひと月以上も様子を見ない、という管理方法ではないと思う。もちろん現代のように頻繁に目を配る管理体制でも、ここ数年問題になっているヒグマ、OSO18などの例もあるが、基本的にはオオカミやヒグマは人の活動域を避ける傾向にある。であれば、現代の日本では、米国や過去の日本での被害の頻度と比べると、そのリスクははるかに小さなものであると思われる。

### 6.2 人に対する被害

「オオカミ」というと、とかく「赤ずきんちゃん」の話がついて回り、一般的には「怖い動物」というイメージがあるようだが、現実的にはどうなのであろう。先に述べたポーランドのビエスチャデでは、人とオオカミとの間のトラブルは耳にしなかったし、幾度か訪れたモンゴルでも遊牧民を訪ね歩いて意識調査をしたが、小さな子供だけで家畜の世話をしている一家を含めて、おしなべて「人と出会うとオオカミは逃げていくので、怖いとは思わない」と話してくれた。ただ、オオカミは怖くはないが、ヒツジを襲うので好きではない、という現実的な意見が多く聞かれた。このように、極力人を避けて活動する、それがオオカミの現実の姿のようだ。

しかし同時に他の地域では、人的被害も報告されている。その多くは中央アジア諸国やロシア周辺地域で、狂犬病の個体によるものを除いてもなお、健康なオオカミによる事例も報告されている。それらの国々では科学的な原因究明には至らないことも多く、野犬などの可能性も排除できないが、北米でもオオカミによるとみられる襲撃により人命が失われ、DNA鑑定をもとに確実にその原因が特定されているケースもあるので、やはり人の死に至る事例もあるようだ。

ではなぜ私が調査をしたモンゴルでは、オオカミのいる地域住民はオオカミを恐れていないのだろうか。その大きな理由の一つは「オオカミが人



図5 モンゴルでの人畜被害調査

を恐れて距離を置く行動をするため」だと思う。私が過去に20数頭のオオカミと接した中で感じたのは、やはり彼らは肉食獣であり、捕食行動に出る「スイッチ」が入った時にはかなり大胆な行動に出る、ということだ。であるから、そのスイッチが入る前にオオカミが人や人の活動域、時間帯を避けて行動するような関係を保てるか、そこが重要となってくる。特にオオカミやクマなどの肉食獣との共存を考える上では、「人慣れをさせない」ことが一番大切だと思う。「オオカミが好きだから導入する、オオカミだけは駆除できない」、ではよい結果にはならないと考える。一オオカミ愛好家ではなく、自然界にオオカミが必要であることを真剣に感じ取り、オオカミ同様にシカやそのベースとなる森林生態系など自然全体を捕らえた保護を考えることが必要である。

米国でオオカミ再導入を実現できた裏には、野生動物に関わる研究者や自然保護団体のみならず、日常では自然と触れ合わない人たちも賛同した、という経緯がある。そこには一般市民の間での、「人の手で絶やしたものを再び人の手で復活させることは当然の行為である」という認識の高まりがあり、そのことがオオカミ再導入を具現化へ導いたのだ。私のこれまでの活動の中では、「今まで人の手で自然を壊してきたのだから、今後は一切人の手を加えずに暖かく見守っていく必要がある」という自然保護論が聞かれたが、さんざん自然のバランスを崩した挙句に、温かく見守ってよいのであろうか。自然のことを考えればこそ、人の手を加えて壊したものにはさらに一步手を加えて、人の手で補修する必要があるのではないだろうか。その一端がオオカミ再導入であり、「自然保護」を考えた場合に、どこに意識を置くかが重要だと思う。イエローストーン・オオカミプロジェクトのリーダー、ダグ・スミス博士によると、「オオカミに関連する情報をすべて、真実を隠さずに公開することが大切である」とのことで、ま

ずは多くの情報を集め議論を重ねていく必要がある。

### 6.3 外国産オオカミは外来種か

オオカミ再導入を話題にしたときに、「ニホンオオカミ、エゾオオカミが絶滅した以上、外国産のオオカミはどの亜種も外来種となり、日本には不適切である」という意見が上がるが、オオカミはマングースやアライグマと異なり、本来の日本の自然の中で進化してきた在来種である。地球上でハイイロオオカミという「種」が絶えてしまっているのは話にならないが、諸外国には多数、オオカミの亜種が実在している。そもそも外国産の近縁種が「外来種」として不適切であれば、日本に再導入された中国産トキやロシア沿海州産のコウノトリはどう考えるのだろうか。

分類学上、北海道の亜種エゾオオカミ (*Canis lupus hattai*) にはサハリンの集団も含まれる。そのサハリンのオオカミも1940年代にはすでに絶滅しているが、サハリンとロシア本土の沿海州との間にある間宮海峡は最狭部でわずか7.3kmの距離である。ちなみにサハリンと宗谷岬は42km離れているが、オオカミの一個体のディスパーサルの際の移動距離が、最長で800~1000kmに及ぶことを考えると、その程度の距離はオオカミを再導入する際の問題にならないと考える。もちろん島により限られた地域に隔離された個体群は、長い年月の間には独自の進化を遂げる場合もあるが、サハリンに関しては冬期に一部凍結し、2007年にはロシア本土から渡ってきたとみられる5頭のオオカミが確認されている。であるから北海道への導入を検討する際には、現存するオオカミの中で一番近い地域にいるロシア沿海州のオオカミ、もしくは科学的に近縁種であると確認された北米北西部のオオカミ、どちらでもよいと思う。いずれにしても、実際には亜種は大きな問題ではなく、どの亜種でも北海道(日本)の環境に数世代で適応していくことが予想される。

## 7 共存のカギとなるのは

オオカミやクマなどと人との関係で一番大切なことは、彼らとの距離感である。実はオオカミ導入を考えた場合に、私が一番懸念するのは、「動物好き」の人々である。オオカミを必要以上にかわいがるあまり、彼らに餌付けをするなどして彼らとの距離を縮め、人慣れさせてしまうことにより、トラブルが起こることが予想されるからである。野生動物との距離、特に肉食獣といわれるオオカ

ミヤクマとの間に適切な距離を保てるか否か、そこに成功のカギがあると感じる。オオカミを導入するのかもしれないのか、導入しないのであれば人がその捕食者の代わりを務めるのか、もしくは現状のまま何もしないのか、などいくつかの選択肢があるなかで、シカの数さえ減らせればよいのであれば、人為的な駆除を強化すれば、人に対する被害は防げるであろう。しかし人の能力にも限界はある。私も北海道時代は自ら山に入り、オオカミに与えるシカを捕獲していたが、私には歯周病やリュウマチに罹ったシカは見分ける能力はなく、健康なシカの個体数を維持することは不可能だ。ましてや「本来ある姿」を自然であるにとらえた場合、捕食者の存在抜きにシカの数のみを管理しても、健康な生態系の保全にはならず、真の自然保護とは言えないと感じる。いずれにしても決断するのは道民であり、日本国民である。

【文献】

Carbyn, L. N., Fritts, S. H. and Seip, D. R. (1995)

Ecology and Conservation of Wolves in a Changing World. Canadian Circumpolar Institute, 620 p.  
 Busch, R.H. (2007) The Wolf Almanac: A Celebration of Wolves and Their World. The Lyons Press, 274 p.  
 Musiani, M., Boitani, L., and Paquet, P.C. (2010) The World of Wolves: New Perspectives on Ecology, Behaviour and Management. University of Calgary Press, 398 p.  
 Mech, L.D. and Boitani, L. (2003) Wolves: Behavior, Ecology, and Conservation. University of Chicago Press, 448 p.  
 Mech, L. D. (1970) The Wolf: The Ecology and Behavior of an Endangered Species. University of Minnesota Press, 384 p.  
 桑原康生 (2014) オオカミの謎. 誠文堂新光社, 143 p.

桑原 康生 (くわはら やすお)

1962年長野県生まれ。青山学院大学文学部英米文学科卒。「株式会社オオカミの森 Howlin'Ks Nature School」代表。1995年から2019年まで北海道川上郡標茶町にてオオカミ延べ27頭、ヒョウ1頭、馬5頭、イヌワシ、アカオノスリ他の動物たちと暮らし、自然教室を開いた。著書に『オオカミの謎』(誠文堂新光社 2014)、『オオカミを放つ』(共著 白水社)。

「自然を語る会」のご紹介

当協会では、2008年から「自然に関する会員・市民の意見交換の場」として「自然を語る会」を開催しています。最近の話題と講師は以下のとおりです。どなたでも受講していただけますので、まわりのお知り合いにもお声をかけ、ご参加ください。

2022年度

- ① 8月9日「エネルギー問題と自然保護～エネルギーをどうするか」  
在田一則氏 (北海道自然保護協会会長)
- ② 9月13日「北海道の低地湿原保全に向けた展望」  
矢部和夫氏 (札幌市立大学名誉教授)
- ③ 10月11日「針葉樹と広葉樹の相克―針広混交林の生態―」  
松田 強氏 (北大名誉教授)

2021年度

- ① 10月12日「SDGs (持続可能な開発目標) とは何か?」  
池田 透氏 (北大大学院文学研究科教授)
- ② 11月30日「厚岸霧多布昆布森国定公園の指定が意味すること」  
吉中厚裕氏 (酪農学園大学准教授)
- ③ 12月14日「自然界におけるヒ素の問題～北海道新幹線札幌トンネルの要対策土問題など」  
在田一則氏 (NPO法人北海道総合地質学研究所シニア研究員)

2020年度

- ① 9月15日「広域連携と地域連携ですすめる自然環境の保全活動～東日本大震災被災海岸での植生復元、石狩川流域に残された湿地の保全から～」  
鈴木 玲氏 (ひと自然つながり工房主宰)
- ② 10月20日「長沼町のタンチョウも住めるまちづくり」  
平林毅一郎氏 ((公財) 日本生態系協会主任研究員/長沼町政策推進課研究員)

2019年度

- ① 8月20日「円山動物園の森ビオトープ―11年間の植物群落モニタリングから見えてきた外来種と在来種のこれまでとこれから―」  
矢部和夫氏 (札幌市立大学教授)
- ② 9月17日「三角山採石跡地の地質・地層・歴史」  
宮坂省吾氏 (株式会社アイビー 地質調査室)
- ③ 10月22日「身近な自然について」  
佐藤 謙氏 (北海学園大学名誉教授)
- 番外編 9月28日「三角山現地自然観察会―三角山の地質・地層・歴史」  
宮坂省吾氏 (株式会社アイビー 地質調査室) ほか

2018年度

- ① 8月28日「札幌の市街地近郊の外来ナメクジたち」  
興野昌樹氏 (学校法人総合技術学園理事・北海道自然保護協会理事)
- ② 9月25日「試験的雑草除去ボランティア―平取のスズラン群生地の事例」  
小川 巖氏 (エコ・ネットワーク代表)
- ③ 10月23日「国内外来生物アズマヒキガエルの駆除活動」  
八谷和彦氏 (深川ひきがえるマスターズ会長)

2017年度

- ① 8月22日「円山公園の外来植物除去の取り組み」  
山川泰弘氏 (北海道自然保護協会常務理事)
- ② 9月26日「天然記念物円山原始林と円山公園」  
笠原三郎氏 (有限会社緑化計画代表取締役)
- ③ 10月24日「アライグマなど外来哺乳動物の影響」  
池田 透氏 (北大大学院文学研究科教授)
- ④ 11月21日「外来種ニセアカシアの生態」  
真坂一彦氏 (道立総合研究機構 林産試験場森林環境グループ主査)

2016年度

- ① 8月23日「自然とのふれあいを楽しく、興味あるものとするために」  
横山武彦氏 (北海道自然観察協会会長)
- ② 9月27日「北海道のジオパーク」  
在田一則氏 (北海道自然保護協会会長)
- ③ 10月25日「知られざる日高の野鳥 (冬鳥編)」  
谷岡 隆氏 (日高鳥類研究所所長)

2015年度

- ① 8月18日「4.1万年前、支笏火砕流堆積物 (SpI) が豊平川を堰止めて“幻の湖” (仮称: 古藤野湖) を形成した」  
関根達夫氏 (豊平川上流ジオサイト研究会)
- ② 9月9日「地元猟友会が出動しました」  
大坂義臣氏 (札幌市もみじ台児童会館館長・北海道猟友会札幌支部理事)
- ③ 10月2日「ニホンザリガニと外来ザリガニ～ザリガニの生態・ニホンザリガニの人の関わり・外来ザリガニ問題～」  
田中一典氏 (NTT docomo・ザリガニと身近な水辺を考える会)
- ④ 11月18日「借楽園とメムの変遷」  
宮坂省吾氏 (株式会社アイビー 地質情報室)

2014年度

- ① 8月26日「木を見て、森も見てください」  
興野昌樹氏 (円山動物園の森協議会委員・学校法人総合技術学園理事)
- ② 9月30日「支笏湖の生い立ちと自然」  
若松幹男氏 (地図と鉱石の山の手博物館理事)
- ③ 10月28日「根室半島フレシマの自然景観と植物」  
佐藤 謙氏 (北海道自然保護協会理事・北海学園大学教授)

2013年度

- ① 8月29日「ヒグマ対策を考えてみよう」  
早稲田宏一氏 (NPO法人EnVision環境保全事務所)
- ② 9月26日「全国各地の事例から風力発電を考える」  
佐藤 謙氏 (北海道自然保護協会会長・北海学園大学 教授)
- ③ 10月24日「希少種ヒゲナソウの減少傾向と保全の取り組み」  
西川洋子氏 (道総研 環境科学研究センター 自然環境部生態系保全グループ 研究主幹)
- ④ 11月21日「宮島沼の保全再生とワイズユース～ごはんを食べてマガンを守る」  
牛山克巳氏 (宮島沼水鳥・湿地センター 専門員)

2012年度

- ① 8月30日「エゾシカ対策を考えよう」  
佐々木克之氏 (北海道自然保護協会 副会長)
- ② 9月27日「人知れず消えるのか、道内の水草～ヒナミクリを例として」  
山崎真実氏 (札幌市博物館活動センター 学芸員)
- ③ 10月18日「外来種ニセアカシアを取り巻く言説の科学的根拠およびニセアカシアの社会的位置づけ」  
真坂一彦氏 (北海道立総合研究機構 林業試験場森林環境グループ主査)
- ④ 11月29日「石狩に集中する風力発電施設」  
落合克尚氏 (北海道自然保護協会 理事)
- ⑤ 12月13日「湿原や草原における夏鳥の減少」  
玉田克巳氏 (北海道立総合研究機構 環境科学研究センター自然環境部生態系保全グループ 主査)

2011年度

- ① 8月10日「はまなすの丘の定期観察から見える石狩海岸の自然」  
安田秀子氏 (石狩浜定期観察の会 代表)
- ② 9月21日「風力発電施設を造ってはいけない場所」  
佐藤 謙氏 (北海道自然保護協会 会長)
- ③ 10月19日「エゾシカ問題、現場からの提言」  
森田正治氏 (森田動物病院院長、NPO法人道東動物・自然研究所 理事)
- ④ 11月30日「札幌市中心部・豊平川の鳥」  
戸津高保氏 (北海道野鳥愛護会 副会長)
- ⑤ 12月14日「川歩きのスズメ―床丹川から考える―」  
樽原大地氏 (北海道の森と川を語る会)